

宮古教育時報

発行者 沖縄県教職員組合
 宮古支部 情宣紙
 TEL 72-3328 FAX 73-2603
 ◇ 各分会の情報をお知らせ下さい。
 E-mail: otu-m@miyako-ma.jp

第11回 広島平和交流の旅から

はじめに

8名の平和交流の旅が8月4日から始まった。初日の朝、那覇空港で集合した時、団長の青年部長の前花さん以外は初対面で、搭乗手続き等で慌ただしく自己紹介もしないまま一行は博多空港→博多駅→広島駅、そして宿泊ホテルの三井ガーデンホテルへ到着した。ようやくホテルのロビーで一息つき、お互いの自己紹介をした。今回のメンバーの一人が広島出身ということで、慣れない土地での地理や交通機関等への不安は解消(?)された。

平和行進では、数年前に出会った広島教組の方と再会。彼女の平和に対する熱い思いとパワフルさはあの時のままであった。同じ思いを持ったもの同士はお互いを引き寄せると言うが、今回の旅でも然り。平和を希求する熱い思いを持ったものが集い、その思いを共有し、素晴らしい出会いと平和学習が充実した旅になった。

広島出身の先生の提案で爆心地付近の本川小学校平和資料館と袋町小学校平和資料館を訪問することができた。(感謝)袋町小学校平和資料館では、当時我が子の消息を案じて書き記した文字や教え子に自分の所在地を知らせるために記した文字が校舎の壁に65年前のまま残されており、胸を打たれた。

戦争は全ての人を不幸にしてしまう。被害者、加害者いろいろあるが、戦争時で人は狂気化し、善悪の分別がつかなくなったり、正義がまかり通らなくなってしまふ。戦争が全ての悲劇を起こしてしまう。この世から戦争につながる全てのものが廃絶され、いついつまでも世界中の人が笑顔で平和に過ごせる日々が来ることを切に願う。

65年目の夏 in 広島

蝉が鳴いている。夏の日差しが容赦なく照りつける中、川面には穏やかなささ波が立っている。木陰のベンチに腰掛けると清らかな風が吹いている。

ちょうど今から65年前の8月6日、午前8時15分、広島に街に原子爆弾が落とされた。街は一瞬にして焦土と化し全滅した。眼下に流れるここ元川の川面にむかってたくさんの人々が水を求めて殺到したという。多くは火傷で皮膚は縮れ、のどの渇きを潤すことなくそのまま亡くなり、その死体で川は埋め尽くされていたという。

2010年8月6日、午前8時その川に隣接する広島平和記念公園では平和記念式典が行われていた。多くの参列者の中に例年とは違って、核を保有する国英仏そして米の代表が出席した。米国のルース駐日大使は、式典を通して、またその後のメディアへのインタビューに対し一切コメントすることはなかったが、それでも核を広島・長崎で使用したことを肯定している国の代表がこの式典に出席したことの意義は大きい。さらに今回初めて潘基文国連事務総長がこの式典に出席し、「核兵器のない世界実現」へむけてのスピーチを行った。

かたや日本の菅首相もこの式典でスピーチをしたが、その後のインタビューで、非核三原則は堅持するものの、「国際社会には核戦力を含む大規模軍事力が存在し、核抑止力はわが国にとって引き続き必要だ」とする、とても矛盾したコメントを発表した。

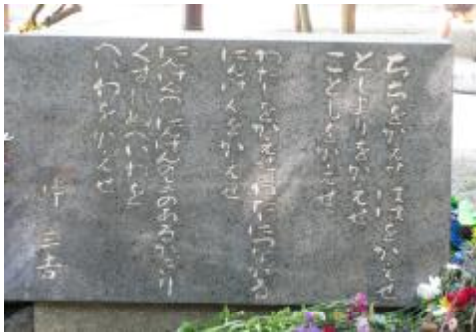
世界が核廃絶にむけて急速に動きだした中、唯一核が使用され、多くの犠牲を今だに払い続けている日本のトップがこの程度の考えとはなんとも言いようがない(怒)。

2010年8月7日、今日もここ広島平和記念公園では蝉が鳴いている。近くの相生橋の方から反戦・平和への祈りを込めた歌声が風に乗って聞こえてくる。

2010年 8月7日 午前11時 広島平和記念公園ベンチにて 書記局 福原 学

* 今回の旅で、広島・長崎に関する平和資料DVD等を購入してきました。借用希望の方は支部まで連絡を下さい。

～お知らせ～ 8月17日・18日は予定通り教育実践夏期講座開催。申込み受付中! 詳細は別紙にて



平和記念公園 三吉祈念碑



原爆ドーム



大久野島毒ガス貯蔵庫跡

平和宣言

「ああ やれんのか、こがなあ辛(つら)い目に、なんで遭わにやあ いけんのかいのう」——65年前のこの日、ようやくにして生き永らえた被爆者、そして非業の最期を迎えられた多くの御霊(みたま)と共に、改めて「こがなあ いびせえこたあ、ほかの誰(だれ)にも あっちゃあいけん」と決意を新たにす8月6日を迎えました。

ヒロシマは、被爆者と市民の力で、また国の内外からの支援により美しい都市として復興し、今や「世界のモデル都市」を、そしてオリンピックの招致を目指しています。地獄の苦悩を乗り越え、平和を愛する諸国民に期待しつつ被爆者が発してきたメッセージは、平和憲法の礎であり、世界の行く手を照らしています。

今年5月に開かれた核不拡散条約再検討会議の成果がその証拠です。全会一致で採択された最終文書には、核兵器廃絶を求める全(すべ)ての締約国の意向を尊重すること、市民社会の声に耳を傾けること、大多数の締約国が期限を区切った核兵器廃絶の取組に賛成していること、核兵器禁止条約を含め新たな法的枠組みの必要なこと等が盛り込まれ、これまでの広島市・長崎市そして、加盟都市が4000を超えた平和市長会議、さらに「ヒロシマ・ナガサキ議定書」に賛同した国内3分の2にも上る自治体の主張こそ、未来を拓(ひら)くために必要であることが確認されました。

核兵器のない未来を願う市民社会の声、良心の叫びが国連に届いたのは、今回、国連事務総長としてこの式典に初めて参列して下さっている潘基文閣下のリーダーシップの成せる業ですし、オバマ大統領率いる米国連邦政府や1200もの都市が加盟する全米市長会議も、大きな影響を与えました。

また、この式典には、70か国以上の政府代表、さらに国際機関の代表、NGOや市民代表が、被爆者やその家族・遺族そして広島市民の気持ちを汲(く)み、参列されています。核保有国としては、これまでロシア、中国等が参列されましたが、今回初めて米国大使や英仏の代表が参列されています。

このように、核兵器廃絶の緊急性は世界に浸透し始めており、大多数の世界市民の声が国際社会を動かす最大の力になりつつあります。

こうした絶好の機会を捉(とら)え、核兵器のない世界を実現するために必要なのは、被爆者の本願をそのまま世界に伝え、被爆者の魂と世界との距離を縮めることです。核兵器廃絶の緊急性に気付かず、人類滅亡が回避されたのは私たちが賢かったからではなく、運が良かっただけだという事実(じじつ)に目を瞑(つ)ぶっている人もまだ多いからです。

今こそ、日本国政府の出番です。「核兵器廃絶に向けて先頭に立」つために、まずは、非核三原則の法制化と「核の傘」からの離脱、そして「黒い雨降雨地域」の拡大、並びに高齢化した世界全(すべ)ての被爆者に肌理(きめ)細かく優しい援護策を実現すべきです。

また、内閣総理大臣が、被爆者の願いを真摯(しんし)に受け止め自ら行動してこそ、「核兵器ゼロ」の世界を創(つく)り出し、「ゼロ(0)の発見」に匹敵する人類の新たな一頁を2020年に開くことが可能になります。核保有国の首脳に核兵器廃絶の緊急性を訴え核兵器禁止条約締結の音頭を取る、全(すべ)ての国に核兵器等軍事関連予算の削減を求める等、選択肢は無数です。

私たち市民や都市も行動します。志を同じくする国々、NGO、国連等と協力し、先月末に開催した「2020核廃絶広島会議」で採択した「ヒロシマアピール」に沿って、2020年までの核兵器廃絶のため更に大きなうねりを創(つく)ります。

最後に、被爆65周年の本日、原爆犠牲者の御霊(みたま)に心から哀悼の誠を捧(ささ)げつつ、世界で最も我慢強き人々、すなわち被爆者に、これ以上の忍耐を強いてはならないこと、そして、全(すべ)ての被爆者が「生きていて良かった」と心から喜べる、核兵器のない世界を一日も早く実現することこそ、私たち人類に課せられ、死力を尽して遂行しなくてはならない責務であることをここに宣言します。

2010年(平成22年)8月6日

広島市長 秋葉忠利